

評伝 矢内原忠雄(三)

A Critical Biography of YANAIHARA Tadao (Part 3)

関 口 安 義

SEKIGUCHI Yasuyoshi

第三章 向陵の青春

一 友情と信仰

わたしは別稿「恒藤恭と芥川龍之介―蘆花『謀叛論』を介在として」^①で、恒藤恭(当時、井川恭)と芥川龍之介を強く結びつけたのは、蘆花の「謀叛論」演説にあったとした。同様に矢内原忠雄と先輩河合榮治郎を結びつけたのも、蘆花演説なのである。

井川恭の一高時代の日記「向陵記」に、芥川の名が最初に登場するのは、一九一〇(明治四三)年十一月二十九日、火曜日のことである。入学二ヶ月以上経つても、二人の関係はまだ疎である。その頃の井川恭の同級生への関心は、南寮十番の仲間、――矢内原忠雄・森田浩一・武田章一・三溝又三・水沢雄三九らにあった。入寮一ヶ

月余、井川は矢内原と新渡戸稲造校長宅を訪ねている。井川の「向陵記」の一九一〇(明治四三)年十月二十五日の記事に、「三時矢内原君と、新渡戸さんの面会日のグループにゆく」とあり、この日の様子が記されている。中に「誰かゞ人生觀を問ふ。キリスト教でハ神のみ心のまゝに、といふが神のみこゝろの解釈は、人に依てことなるであらう」と新渡戸が答えたとある。

芥川は最初の一年は入寮せず、新宿の自宅から通つたので、井川恭との交流がほとんどなかったのも、致し方なかった。芥川が入寮するのは、二年生になってからであり、中寮三番で井川と起床を共にするようになる、その交際度は急に高まる。が、二人を強く結びつけたのは、それ以前の蘆花「謀叛論」あつてのことなのである。入学した年に生じた大逆事件は、一高のフレッシュマンにも影響を与えていた。井川の「向陵記」の一九一〇(明治四三)年十一月十日、

木曜日の記事には、「昨日午后、幸徳秋水、菅野すが以下二十五名の社会主義者が、皇室に対する陰謀によつて審理中の件が、いよいよ大審院の特別公判にうつさるゝ事になつたとの号外が出たが、けさは新聞の三面ハその為に賑うて居る。室でも教場でも噂が盛んであつた」とある。井川や矢内原のいた南寮十番では、皆の合意で『東京朝日新聞』『国民新聞』『読売新聞』『萬朝報』の四紙をとつていた。彼ら一高生は皆、政治や社会には敏感であつた。

寮生活をしていない芥川は、主として英文科の教室で、大逆事件にかかわる井川恭をはじめとする級友の意見を聞く。井川はシャープな頭脳で説得力を伴つた解説のできる男であつた。が、余計なこととは言わない。確信を衝いた議論ができるのである。ここでの問題は、一九一一年（明治四四年）二月一日に、蘆花の演説を芥川が聴いたか、聴かなかつたかではなく、演説の余波が芥川ら他の一高生にどのように及んでいのかである。

わたしは前章で述べたように、蘆花の演説「謀叛論」の影響は、芥川にも及んでいたという立場に立つ。たとえ直接聴かなくとも、教室での井川恭らによる話題、全学集会での新渡戸校長の話、それに『萬朝報』をはじめとする新聞報道などから事件を知るのに、困難はなかつたはずである。大事なのは、大逆事件の判決を批判した蘆花の演説を契機に、井川恭という人物を芥川が見出したことにある。それは親友の発見であつた。

同じことは、矢内原忠雄における、「謀叛論」を通しての、河合榮治郎との交流の深まりにも言える。河合榮治郎は忠雄の入学時の弁論部委員であつた。彼は一八九一年（明治二四年）二月十三日、東京府南足立郡千住町（現 東京都足立区千住二丁目）に生まれ、育つた。

忠雄と同様、他の子どもよりも一年早く千壽尋常高等小学校尋常科に入学、浅草にあつた私立郁文館中学の分館に入学した。公立中学校は学齢未満で受け入れてくれなかつたからである。この学校に榮治郎は一年半ほど通ひ、のち芥川と同じ東京府立第三中学校に転校した。それゆえ年齢は芥川と一つ違いながら、学年は二つ違つた。中学時代の河合榮治郎は、読書の好きなすぐれた文章を書く少年であつた。彼が府立三中の『学友会雑誌』に載せた「項羽論」²は力作で、芥川の「義仲論」³に強い影響を与えた人物論であつた。

「項羽論」は四百字詰原稿用紙にして約四十六枚、「人若し支那史を讀みて、項羽が僅に数万の兵を以て、秦軍四十万を鉅鹿に敗るに至り而して後彼が四面楚歌の内泣いて虞姬に別るゝに至らば、いかなる感慨をば生ずべき余は彼がために一滴の哀涙を禁じ得ざるものなり」にはじまる。徳富蘇峰の文体の強い影響を受けている。榮治郎はここに英雄項羽を、格調高く論じる。司馬遷の『史記』に筋を負いながら、時に自己の感想を交えて文章は展開する。「死は人をして静ならしむ。死は人をして幽ならしむ」と彼は書き、死を恐れず、天の与えた運命を甘受し「た項羽に、満腔の共感を示す。ここには後年の戦鬪的自由主義者河合榮治郎の面影が、早くも顔を出している。項羽は死ぬことによつて甦つた。壮烈な死があつて、はじめて項羽は後世の人々の胸に甦り、歴史の中に名を残したのだと榮治郎は言う。それは第二次世界大戦中に思想に殉じた彼が、大戦後評価されるようになったこととどこか通うものがある。

「項羽論」は、「名利を外に花の活動をなさんこそ男児の本領と云ふべけれ。嗚呼我れは劉邦となりて栄えんよりも項羽となりて死ななかな」で結ばれる。文章は格調高く、三十一歳で烏江のほとり

自ら首をはねた悲劇の武将の生涯を、共感を持ってうたいあげたものである。

わたしは芥川龍之介の研究途上で河合榮治郎の「項羽論」にめぐりあった。「項羽論」は、若き日の河合榮治郎のみならず、その生涯を考えるのにきわめて大事な文章なのである。が、これまでの河合榮治郎研究において取り上げられることはなかった。府立三中の『学友会雑誌』という、マイナーな雑誌に発表された習作として片付けられてしまったのだらうか。いや、そうではあるまい。東京都立両国高等学校(旧、府立三中)の校史資料室(淡交会資料室)や日本近代文学館が所蔵するこの雑誌の調査を怠ったからではないだらうか。それゆえ河合榮治郎の全集別巻に収められた「著作目録」にも「項羽論」の記述はない。

わたしは「河合榮治郎と芥川龍之介(序)」⁴で「項羽論」を取り上げ、かなり詳しく論評した。ここでは中学生河合榮治郎が書いた「項羽論」に「彼の終生の想い」が託されていたとした。それはドン・キホーテ的戦闘的自由主義者河合榮治郎の生涯をかけた理想であった。

ここで論を矢内原忠雄と河合榮治郎とのかかわりに向けた。府立三中を卒業した河合榮治郎は一高に進学、芥川龍之介や矢内原忠雄が入学した年には三年に在学していた。すでに記しているが、河合榮治郎は弁論部委員であり、そこに忠雄は入部し、榮治郎との交わりを深めることになる。

『矢内原忠雄全集』は、第二十八巻に日記を収録している。矢内原日記については、すでに断片的には記しているが、全集収録日記は、明治四十四年にはじまり、断続し、昭和二十二年に至る。本巻

の「編集後記」には、「本全集では、紙幅の関係上「日記」の全部を収録することは不可能なので、代表的なものを収めることを主旨として、つぎの十年を選びかつ日記本文のみに限り、巻末の手控え等は一切省略した」として、選ばれた十年の年が記載されている。

選択は編集委員によってなされているが、「活字にしてくれたらなあ」と思う年もある。例えば神戸一中時代の日記や一高入学年度の一九一〇(明治四三)年、それに京大事件のあった一九三三(昭和八)年の日記である。中学時代の日記は、矢内原伊作の『矢内原忠雄伝』がかなり紹介してくれているのでまだしも、一九一〇(明治四三)年後半の日記は、はじめての東京での生活を記録しているはずである。特に一高入学当初の記録は、入寮の印象、寮の規則や最初の授業、当時の教師連や仲間の動静を伝えているはずで、忠雄自身の証言が知りたかった。本論では、これまで井川恭の日記「向陵記」(向陵記 恒藤恭 一高時代の日記)で、矢内原忠雄の一高入学当初の生活を追ってきたが、理想はここに本人自身の証言を得ることにある。また、最初の寮生活で起床を共にした恒藤恭(旧姓、井川恭)がかかわった京大事件への忠雄の見解が、どのようなものであったかも確認したかった。時がくれば、ご遺族宅に当の年代の日記が保存されている(「編集後記」による)とのことゆえ、こうした要望は、解決することかもしれないが……。

全集収録矢内原日記には、はじめて河合榮治郎の名が登場するのは、一九一一(明治四四)年一月二十日、金曜日のことである。当日は雪であった。「降りも降りたり、一面の銀世界。」と書いて、忠雄はその日の記録をはじめ。続いて「月の光かと思えば、思ひがけなや既に一寸ばかりも積みてあらんとは。終日續紛として降り止まず、

積ること実に四五寸、僕にとりては珍らしきことにて、分館の赤い壁も今日は流石詩的に見ゆ」とくる。当時の分館(旧館)の外壁は、ピンク色であった。

雪は故郷今治では珍しい。それゆえに忠雄は、雪に興奮したのである。井川恭の「向陵記」のこの日の記事の冒頭に、「まだくらくら、矢内原君かたれかのこゑで、雪がふつてるんだぜ、雪がといつた」とある。忠雄の雪に寄せる思いが伝わってくるかのようだ。

この日は弁論部の練習会があった。各自、懐いている思いを述べあう会である。「特別に何の準備もなかりしかど、一昨日読みたる清沢先生の信念」中救済に関することを骨子として余の信仰に関することを述べたり」とある。清沢先生とは言うまでもなく、清沢満之であり、忠雄はこの小冊子を同級の山崎茂人(能瀬茂人)から借りて読んだのであった。二日前の日記にそのことが記されている。そこには「君は仏教の信仰あるものの如し。我は寧ろ基督教に傾向あり、然れどもこの宇宙を主催する一のPowerを信ずるに於て我に仏教もなければ基督教もあらず」の文章を見出す。これは忠雄のキリスト教信仰が、一高入学四ヶ月の時点では、いまだ確立していなかったことを証明する。

同じ年に入学した長崎太郎は、入学の年の一九一〇(明治四三)年のクリスマスに、日本キリスト教会市ヶ谷教会で秋月牧師から洗礼を受け、級友に教会への出席を勧めていたのとは、大分違う。忠雄は今治というキリスト教の町の郊外に生まれ、育ち、W・S・クラークが基礎を築いた札幌農学校の流れを汲む神戸中学校に学んだ。そして川西實三というクリスチャンの先輩に導かれて一高に入学したとはいえ、まだ宗教的には固まっていなかった。このことは大事なことなの

で記しておく。この頃忠雄は、山崎茂人の案内で、佐々木月樵の講話を聞いている。佐々木月樵は清沢満之に学んだ仏教学者で、当時はまだ東京にあった真宗大学(のち真宗大谷大学と改称、京都移転)の教授であった。

さて、一月二十日、金曜日の矢内原日記には、弁論部練習会での感想が記されている。「この席上得たる感想」として、以下のような文面が見出せる。

河上「丈太郎」さんより——毎朝 Bible をよむこと。

河合「榮治郎」さんより——憂ひを共にする友は得易し。されど喜びを共にする友は得難し。友人の病気を心より見舞ふことは出来るが、友人の成功を心より祝ふことは容易に出来がたし。友人の成功は即ち我が競争に敗れたるものなるを思へ。！
——あゝ、戦慄すべき哉。

矢内原忠雄は弁論部の二人の先輩から大きな影響を受けた。河上丈太郎からは、「毎朝 Bible をよむこと」の必要性を、そして河合榮治郎からは、真の友とはいかなるものかを学んだ。

この頃から忠雄と河合榮治郎との仲は接近する。一月二十四日、火曜日の忠雄の日記には、入学前から知り合っており、のち親友となる三谷隆信と河合榮治郎の三人で散歩し、川西實三の所へ行つたことが記されている。忠雄の属した南寮十番には水沢雄三九という新潟県出身のやや変わった男がいた。寮生活になじむことのできな男であった。矢内原日記にはしばしば登場する。この日の日記には「自分は水沢君を決して憎まなかつた。寧ろ常に好意を持つてゐる

た。而し今までのわが態度は尋常の態度に過ぎまい。(中略)あゝ偽り、偽り、僕のすべてはいつはりだ。口に道徳宗教を云々しながら、一の友人をも慰めてやらうとの心出来ぬとは、誠に僕は何たる馬鹿者ぞや。僕はつくづく己の小なるを覚えた」などの反省のことばが続くのは、先輩の川西實三や河合榮治郎の友情論を聞かされたからに他ならない。忠雄はこころ優しい青年であった。「實ちゃんはいえらい、河合さんはえらい」のことばも記録されている。

一月二十七日、忠雄は満十八歳の誕生日を迎えた。この日の日記には「僕は自分の小なることをいよいよ覚つた。僕は新しい生活に入らんとしてをる。虚偽をすて見識立てをやめて、へりくだつて生活に入らんとしてをる。記念すべき誕生日だ」とある。さらに「夜水沢君と寢室にて語る。君元来の頑固なる個人主義者なるにあらず。話をきくに実に半はわれら同室者がかくの如くなさしめたるものとも思ふ。素より水沢君は感情激発して人に好まるゝの性にあらざれど……」との文面も見出すことができる。同室の問題児水沢雄三九のことは、井川恭の日記にも記録されている。例えば寢室での放談を禁ずることを同室会議に提案し、譲らないなど大人げないところがあった。

翌二十八日、土曜日の矢内原日記には、「青年会の出席を石田君よりすゝめられしも気のりがせず」、出なかつたことが記されている。石田君とは、のちにトルストイの研究で頭角を現すもの、若くして逝つた石田三治のことである。石田は青森県七戸町出身。一八九〇(明治二三)年二月十三日生まれなので忠雄の二歳年上であつた。彼は当時、日本メソジスト横浜教会の会員で、熱心なクリスチャン。忠雄の一級上の文科に在籍し、一高基督教青年会の熱心

なメンバーであつた。二十九日、日曜日の日記には、水沢雄三九を誘ひ、向島へ行ったことが記録されている。以下のようなようだ。

午後水沢君を誘ひて向島へ行く。行く行く色々な話をする。水沢は曰く、余は個性を重んず、個性を満足せしむる行動をとらんと欲するものなり。然れども余は徒に個人の声を揚げて他一切を顧みざるにあらず。親に対する務、責任の感等は身にしみこみて個性に加はれり。故に親に対する務を思はざる行為は個性の満足を得ず。これ余の欲する処にあらざるなりと。

余は思ふ、水沢の principle はかくの如く甚だ立派なるもその平常の行為かくの如きは感情の激発によらずんばならず、高尚なる感情を涵養してその心を和ぐるは最も必要なことにあらずや。余はなほ修養によりて彼の所謂個性の標準の高まり行くべきを謂ひ且つ宗教によりて平安の生活を得べきを思へり。

忠雄は友情を欲していた。水沢を向島に誘つたのも、その一つの現れであつた。こうした時に向こうから接近してきたのが、河合榮治郎であつた。すでに触れたように、河合榮治郎は、芥川龍之介の府立三中の先輩である。河合は秀才好みの傾向があり、府立三中の後輩で、一高に合格した芥川龍之介にドイツ語の独習書を贈り、「一カ年の後新に第一高等学校に入学したる人々の中より小生(注、芥川龍之介をさす)の最も信頼する一人を選びて更に此書を贈るを約せしめ候」(芥川の小野八重三郎宛書簡、一九一・三二五付)というような芸を弄し、芥川の気を誘うというようなところがあつた。河合は川西實三から神戸一中卒業の秀才矢内原忠雄の存在を、入学以前か

ら知らされていた。会ってみると稀にみる秀才、そして知性と柔軟な心の持ち主であった。

河合は当時一高三年生、東寮にいた。一月三十日の「矢内原日記」には、「午後二時頃河合さんに誘はれて東寮の寢室に至りて語る。水沢君の事を語りしに非常に喜んで下さった」とある。この日は河合と寮の食堂で夕飯を共にし、その後二人して川西實三を訪ねている。日記には「十二時帰寮、南寮入口まで来りしに更に亦誘はれて運動場に出でうづくまりて語る。友達に対する態度の話が出て河合さんは武士的態度といふことを言はれて全くは自分の感情を赤裸々に表さぬといふ様なことを言はれたり。赤城の生活の話出で僕は是非ともこの夏行つて見たくてたまらず、敬愛する河合さんと美しき赤城の上に清き生活を送らんとの念は馬鹿に強くなつた。河合さんは、はじめ「忠雄さん」なる語を用ひられた」とあり、さらに「星は一つも見えぬ暗い夜だ、運動場のゆるぎ傾斜に僕は河合さんに抱かれ夢の如く赤城の清き交りを思つた。前面の人家も連山の如く見えた。あゝほんとに夢心地であつた。時間の観念も頭にない。眠くもない、さして寒くもない、恍惚としてゐた」とある。

これは一種の同性愛でなくて何であらう。河合は忠雄を擁して「忠雄さん、あくまでも pure であつて下さい。僕は君の pure なるを愛します」と言つたという。これに対し忠雄は、同日の日記に「僕は自分が pure だとはとても思へぬ。汚れの多い罪の深い、弱い弱いこの身、恥づかしくてたまらね。(中略) 向陵に入つてより、いよく川西兄に接し、新渡戸先生のお話を聞きて自分はわがつまらなき見識を捨て、すべての人を愛して social 的な生活をなしたいと思つた。これも勿論わるくない、否々大いに欲する処である。然し僕

はこれがためにわが中心たる処を失ひ、軽薄たらんとする傾きが生じたのではなからうか、僕は今日 pure であつて下さいとの言を聞きて冷汗背を沾した。あゝあゝ中心がほしい。権威が多い、軽薄に走らん走らんとする心を引きしめて神によりたい」と書きつけている。矢内原忠雄は河合榮治郎との友情に感謝しつつも、一方で、自分が河合の言うような pure でないことを自覚し、「神によりたい」との心情を懐くのであつた。後年、時代に対峙した二つの強烈な個性の出会いが、この夜あつたことは、確かである。「時計を見れば、はや暁五時だ」の記述もあるが、二人は一月三十日の午後二時から翌朝まで話通しだったのである。

それは蘆花の「謀叛論」が一高第一大教場で語られるまさに前夜であつた。一九一一年(明治四十四)年二月一日の蘆花の演説は、二人をさらに固く結びつけるのであつた。新渡戸稲造一高校長は、蘆花の演説のあつた翌日二月二日、進退伺を伺いを文部省に出す。すでに前章の「三 蘆花「謀叛論」」に記したが、全校集会の感想を記した忠雄の二月三日の日記には、「思ふに新渡戸校長は既に進退伺を呈出せられたるならん」とあつた。忠雄は新渡戸校長に親炙していたから、やり切れない思いがあつたらう。「夜十時半頃河合さん訪ねられ運動場に出でて語る。寒甚しくて部屋に入る。講演会に関する委細の事情を話して下さつた」とあるのも、同日の日記である。河合榮治郎は弁論部の委員ゆえ、蘆花の演説を主催しただけに事情をよく知っており、弁論部に問題がないことを忠雄に語つたのであろう。蘆花演説は二人の仲をさらに強固に結びつけたようだ。

一高運動場は、友情を育てる場であり、やがては祈りの場ともなる。現在はこの大学にもあるような学生談話室のような場は、当

時の一高にはなかった。熱心に語ったり、一人静かに祈る場は、運動場であった。一高の運動場の東隅は、矢内原忠雄にとつてのオリブ山(橄欖山)であった。一九一一年(明治四四)年三月三日の矢内原日記には、「僕はこの頃夜はいつも運動場へ出て祈りをしして寝る」とあつて、一高時代のよき祈りの場が、校庭であつたことを書きつけている。長崎太郎の日記にも、とどころに校庭で祈る忠雄の姿の断片が見られる。

河合榮治郎と矢内原忠雄とのかわりを深く考察した忠雄の子息矢内原伊作の『矢内原忠雄伝』⁵は、当時の二人の交流についてふれ、「こうして河合榮治郎は忠雄に接近し、忠雄もまたこの尊敬する上級生と親しくなれたことを喜んだ。二月一日、忠雄は川西実三のところへ、河合榮治郎が川西に宛てて書いた手紙を見せられたが、それには「川西さん、よく忠雄さんを紹介してくれました。忠雄さんの純潔な性格と温かい友情とは私に非常の力を与へました。同じ建物の中に忠雄さんが居ると思へば、大いに力を得ます」というようなことが書かれていた。忠雄は驚き、喜び、感謝し、「河合さん」に負けぬよう自分も大いに奮励しなければ、と思つた」とある。

河合榮治郎とともに向陵時代の忠雄に先輩として影響を与えたのは、神戸一中時代から目をかけてくれた川西實三である。川西は忠雄の一高入学時には、すでに一高を卒業し、東京帝国大学法科大学に入学していた。が、当時の一高は現在の東大農学部(農学部)の場所にあり、隣接していた。そこで近くに下宿していた川西實三と忠雄が会うことはたやすく、忠雄の日記を見ると、頻繁に会つて何かと刺激を受けている。時には河合榮治郎とともに行くこともあつた。忠雄と河合榮治郎が最も接近するのは、一九一一年(明治四四)年の新春一月

から四月までの期間であつた。それは忠雄一高一年生、南寮十番で井川恭(恒藤恭)らと過ごしていた時代のこと、新渡戸校長の修身講話に聞き惚れ、蘆花の「謀叛論」演説に心を動かされた時期とも重なる。

春の試験を終えたこの年三月三十一日、金曜日、忠雄は河合榮治郎と連れだつて赤城山へ行くことになり、午後一時半上野駅を出る。川西實三は上野駅まで見送りに来たものの同道でできなかった。赤城山は当時の一高生あこがれの山であつた。この一ヶ月後、芥川龍之介も府立三中時代の親友西川英次郎と赤城山に来て、「雪が三尺もつもつて殆ど全く凍つた沼を囲む山々はまつ白です」(山本喜誉司宛、一九一一年四月六付)との便りを出している。そういえば芥川ら四人のグループ(芥川・井川恭・長崎太郎・藤岡蔵六)が一高卒業旅行の目的地にしたのも赤城山であつた。

先の『矢内原忠雄伝』によると、「赤城山には猪谷という旅館があり、一部の東大生や一高生が自然のなかで浩然の気を養うためによくここを訪れたのである」とある。忠雄と寮で同室だつた井川恭には、「赤城の山つゝじ」という文章があるが、この山を「赤城山」と云ふのは上州の北に座を構へて居る熄火山で、山の高さは、海拔六千三百尺ばかり、頂きの噴火口の跡は湖水を湛へて大沼と呼ばれて居る、それを囲む外輪山は高く成り低くなりして居て、高く成つたところの峯々には大黒檜山、小黒檜山、地蔵が嶽、鈴が岳とそれ々々名がついて居る。山は四方八方に深谷を射出して、長いく裾野を曳き、はるかに信濃なる浅間の山と向ひ合つて雄大な山の姿を競ひ合つて居る」と書いている。

その日二人は前橋在の「木暮村の旅宿」に泊まり、翌朝八時赤城山

に向かう。「新坂をあがりたる処、烈風軽雪をまきて来り、氣凜烈、驚き起ち一尺の積雪を蹴つて猪舎に投宿す。老婆、囲炉裡に木を投じて快く我等を迎ふ。炬燵により湯に入りて寝る。湯桶の周囲凍れり、寒思ふべし、飯甚だうまし」と「忠雄日記」にはある。新坂とは新坂峠のこと。眺望のよいところである。猪舎とは、先の伊作氏の『矢内原忠雄伝』で紹介されていた「猪谷いかやという旅館」のことである。芥川・井川らと赤城行きに同行した藤岡蔵六の「一高卒業記念旅行」の一節には、「四人は勇躍して湖畔の旅人宿に着いた。皆で宿帳をめくつて居ると、村田祐二先生の名が見付かった。先輩河合榮治郎さんも来てるぞと誰かが叫んだ」とある。村田祐二先生とは、一高の英語の教師である。彼らが泊まったのも、「猪谷」であった。一九一一(明治四四)年の矢内原忠雄と河合榮治郎との赤城山行きは五日間に及び、二人は濃密な時間を共有した。河合榮治郎は親切で、実行力のある姿を忠雄に示した。また、その「歴史談政治談」の話は、面白かった。が、榮治郎のやや押しつけがましきや独占欲をもつて迫る態度は、忠雄には目を経るにつけ鼻につくようになる。四月二日の赤城山中での矢内原日記には、「河合さんは intellectual mind の方面に於て頗る僕を利してくれる。然しながら heart の brother は實ちやんなり」とある。「實ちやん」とは、言うまでもなく川西實三のことである。また、四月四日の日記には、「朝沼田を発して渋川に向ふ、途平凡甚だいやなり。河合さん顧みて「五日間忠雄さんと一しよに居たが何か忠雄さんのために得るところがあつたかしら」と。僕は實際河合さんの口からこんな言をきくのがいやだ」とある。

二 真剣に神を求める

川西實三・河合榮治郎という二先輩のほか、入学当初から忠雄が心を許した友に、同級の三谷隆信がいた。三谷は忠雄にキリスト教信仰を教えた信仰の友でもあった。三谷隆信は、一八九二(明治二五)年六月十七日、横浜に生まれた。父の事業の失敗で京都府北部の父の郷里、与謝郡岩滝村(現、与謝野町)に越し、京都府立第四中学校(現、京都府立宮津高等学校)から一高に試験入学した。三歳上に兄三谷隆正がいた。言わずと知れた法哲学者で無教会主義のクリスチャン、日本のヒルテイとよばれた人物である。三谷兄弟と三谷家については、矢内原伊作の『矢内原忠雄伝』が的確に語ってくれる。そこでここは伊作氏の要領を得た、三谷家の人々紹介の箇所を引用させていただく。

この兄弟の父の名は三谷宗兵衛、京都府の宮津に近い岩滝村の庄屋の出である。宗兵衛は若くして妻に先立たれ、娘民子(明治六年生まれ)をともなつて横浜に出て生糸商を営んだ。その後再婚して、その妻こうとのあいだに隆正、隆信、妙子(山谷省吾夫人)、田鶴子(川西実三夫人)、隆吉(夭死)、登茂子(夭死)、寿貞子(湯沢健夫人)が生まれたが、これらの兄弟の母のこうは幼児を残して長谷川家を去った人であり、その幼児が後に長谷川伸になり、母の面影を求めて名作『瞼の母』を書いたのだ。長谷川伸がその「瞼の母」と再会し、異兄弟である隆正と兄弟の交わりをするようになったのはずっと後年、昭和八年のことである。横浜の生糸貿易商三谷宗兵衛は事業に失

敗して破産し、明治三五年に郷里に引き揚げた。貧窮におちこんだ隆正以下の弟妹の教育を物心両面から支えたのが異母姉の民子である。三谷民子はミッションスクール女子学院に学び、その宣教師ミス・ミリケンの感化によつてクリスチャンになり、のち母校の教師となり、昭和二年から終生（昭和二〇年に亡くなるまで）女子学院長として女子教育に尽瘁した。内村鑑三とも親交のあつたすぐれた教育者である。

巧みな叙述で三谷家の家系とドラマを紹介している。この短いながら要を得た紹介からわかることは、三谷一家のすぐれた血統である。遺伝子のよきとでもいうのであろうか。長谷川伸と三谷隆正の生涯の仕事にはかなりの違いがあるものの、逆境を乗り越え大きな仕事をなした点では共通する。それは他の兄弟にも重なるものがある。

それはさておき、伊作氏によると一高一年生時代の忠雄は、「三谷隆信と共に一高基督教青年会に属し、その会合に出席し、隆信と親しくなり、隆信に連れられて女子学院のミス・ミリケンのバイブル・クラスに行つたり、三谷隆正を訪ねたりして次第にキリスト教を知つたのである」ということになる。忠雄は一九一一（明治四四）年三月四日の土曜日、隆信と長時間散歩したが、その日の夜、日記に「午後信さんと谷中の方へ散歩。四時間ばかりで帰つた。あゝ信さん、敬愛する信さん、対等の信さん、無口の信さん、僕は信さん愛する、ある意味に於て河合さんよりも」と記している。一方、三谷隆信は「向陵の三年」¹⁰に、「明治四三年矢内原君は神戸一中から、東京の旧制第一高等学校に、私も宮津の京都府立四中から一高に入学した。矢内原君の中学の先輩・川西実三さんと、私の兄隆正はその年に一高

を卒業した友人であつたので、我々二人は入学前からひきあわせられた」と書いている。同年四月五日の忠雄の日記には、「信さんを訪れて語る。僕は実際信さんと友達になつて頂いたのがうれしくてたまらぬ」とある。友情は信仰を育てる土壌であつた。忠雄は三谷隆信と交流することで、キリスト教信仰に次第に目覚めるのであつた。

この頃から忠雄は、真剣に神を求めはじめた。同年四月十二日の日記に彼は、「あゝ、罪、罪。われこそ罪のかたまりである。悔い改めなければならぬと思ふ。しかもそれが口さき、胸さきのみである。愛でなければと思ふ。しかもそれが皆偽りのかたまりである」と書き、さらに「僕は神を信じたい。もし神が居なくして我を救うて下さるものがなければ、僕は全く *despair* である。死すより外はない。又死んだとて仕様がな。然しここには神が居られる。そして私の望みのかゝる処がある様な気がする。僕は神さまにたよりたい。キリストの十字架にたよりたい」とも書きつけている。彼は神を真剣に求めていたのである。

一九一一（明治四四）年四月の忠雄の日記を読んでいくと、この頃、彼はキリスト教を真剣に求めていたことがよくわかる。四月十八日の項には、一高基督教青年会の振興策のことが記されいるが、そこには「遂に朝の祈りの外に夜十時より十一時までの間、運動場の東隅煉瓦の処で祈りをするに成つた」との記事を見出すことができる。忠雄は真剣だった。四月二十二日、土曜日には小石川植物園裏の「斎藤氏方の宗教座談会」に、翌日の日曜日には海老名弾正が牧会する本郷教会（弓町本郷教会）に一人出席したりしている。前者の宗教座談会は、日本基督教会系の主催する集まりであつた。「植村正久先生のお話は実に面白かつた」とある。この日、忠雄は三谷

隆信などで行った。南寮十番で同室の森田浩一も同道した。日記には森田にかかわることとして、「始めて同君と話すことが出来て、真に愉快だった」とある。「森田浩一日記」にも、「矢内君（注、忠雄は皆にこう呼ばれることが多かった）も一所に行つた。途中色々信仰のことについて話す」とある。

後者の本郷教会は一高から近いこともあって、また雄弁家の牧師海老名弾正の教会ということもあって、一高生には人気があった。文科の学生で芥川龍之介や井川恭と親しかった藤岡蔵六も、本郷教会にはしばしば通つた。その著『父と子』¹¹には、「私は一高在学中可なり屢々本郷教会へ説教を聞きに行つた。海老名弾正牧師は雄弁家であつた。而もそれは技巧的雄弁ではなく、牧師の熱烈な信仰と高潔な人格とから自然に迸り出る魂の雄弁であつたので、強く私の心を惹き付けた」とある。忠雄の出席した日の海老名牧師の説教は、「自分は罪あるけれども心の奥そこはやはり清いといふお話」だつたと忠雄は日記に書いている。この日の日記には、「夜運動場に出て祈る会するもの四人。282.317の讚美歌胸にしむ」との一節もある。

忠雄は一高基督教青年会に出席していた。また、一人で、あるいは三谷隆信と熱心に聖書を読んだ。明治訳の『舊新約聖書 HOLY BIBLE』である。英訳でも読んだであろう。そして讚美歌を愛した。忠雄は歌はうまくなかつたとは、何人かの彼を知る人の証言にある。例えば一高の二年から卒業まで東寮十六番で過ごした仲間の石井満によると、「矢内原君の歌声は、少々、今でいうハスキーヴォイスの類で、当時はとにかく「変つた」声の持ち主であつた」ということになる。忠雄はその声を気にすることもなく、この頃からよく寮でも讚美歌を口ずさむようになる。彼は讚美歌の歌曲を愛し、歌う

ことが好きになる。それは生涯を通してのものとなつていく。旧讚美歌三一七番を彼は特に好んだ。「たゞくりかへしくりかへし317」の讚美歌がうたひたい。／近頃は馬鹿に讚美歌がすきになつた」と彼は日記（一九二一・四三〇）に記している。ちなみに、彼の愛唱讚美歌として葬儀（女子学院講堂、一九六一年二月二七日）の際に用いられた讚美歌は、五三七番（新五二〇、「しずけき河のきしべを」）、五二九番（新五一五、「ああうれし、わが身も」）、そして四九〇番（新四八二、「なつかしくも うかぶおもい」）の三曲であつた。

前章で述べたように、一高基督教青年会は月に一度例会があつた。教室で行われることもあつたが、多くは一高裏の聖公会系のテモテ教会（現在）で行われた。小石川植物園で例会を持つこともあつたことは、すでに記した。他に一九二一（明治四四）年春頃からは、祈祷会がしばしば持たれた。例会の様子を記した忠雄の日記、——一九二一年四月二十九日、土曜日は、前章で引用したが、この頃の忠雄の精神は、神を想うことで高揚していた。一高基督教青年会では、讀書会を持つていた。彼はそこにも熱心に顔を出していた。

同室の群馬県出身の渋沢直一は、この頃病氣（肺炎カタル）で学校を休んでいたので手紙を出したところ、返事が来て忠雄を、「心の友」と書いてくれたのに感激する。五月五日の日記に、そのことが記されている。「昨日渋沢君より手紙をうけとつた。つまらなき僕を心の友といつてあつた。あゝ弱き子よ！ 僕は自分で弱くつまらぬ。弱き子は、手をとりあつて行かう！ 警醒社へ行つて『基督信徒のなぐさめ』を求め来る。今度伊豆伊東へ行かれるに就て七日頃に東京で会へるかもわからぬ故その時せめてもの贈物とせんためなり」と。忠雄の友情を心に留めた渋沢直一は、二年生の年末年始、帰省

しなかつた忠雄を、その故郷群馬県太田町（現、太田市）の自宅に招き、歓待している。このことは次章で取り上げる。

五月十六日、成績が発表され、忠雄は一番であった、当日の日記に彼は「成績発表あり。世の中は奇妙なもの。僕が首席たりしといふも僕がなりたるにあらず。人がせしなり。うれしくも悲しくも何ともなし」とある。

六月二日の日記には、同室の井川恭（のちの恒藤恭）とキリスト教問答をしたことと試験の勉強についての心得のようなのが記されている。井川恭は島根県松江市の出身。前章でも一高時代の日記「向陵記」などを通して、その人柄の多少は紹介したが、彼は島根県立第一中学校時代に日本聖公会松江基督教教会牧師オリヴァー・ナイト主催の聖書研究会に出席、キリスト教に触れていた。その母や姉は洗礼を受けた信者であった。井川は同じ英文クラスの芥川龍之介に親しく、芥川に英文聖書 *THE NEW TESTAMENT* を贈ったことでも知られる。彼は中学卒業後、胃の病で四年間の闘病生活を経ての入学なので、忠雄より五歳ほど年上だった。井川恭に關しての詳しいことは、小著『恒藤恭とその時代』¹⁴を参照されたい。この日の「忠雄日記」には、彼のキリスト教観や一高時代の勉強のことが書かれているので、一部を引用する。

夕方井川兄に話しかけられ基督教に対する議論などあり。僕は何もわからぬけれども、内村先生によりて得たる僕の Christianity に対する考を少し云ひて見たり。通常宣教師等の言と異なりたる節ありしと見え井川兄 *Stearns* の感あるを見たり。あゝ基督教と国家と。——困る問題なり。——然れども批評の

立場の立ちて議論して居る間は基督教なるものに同情あらざる也。信仰はたはぶれにあらず。信ぜんと欲すれば先づ少しでも入らざるべからず。余は井川兄を基督教に引き入れんとは決してせず。たゞ余の考をのべしのみ。入ると入らざるとは井川兄その人の自由なり。

——あゝ、宗教はすべて他のものと同じく主観的のものと想ふ。

今日は割合まじめに勉強す。僕は遊んで居てよく出来ればよいが、さうも行かぬ故試験前などには人一倍勉強せねばならぬ。試験が近いといふことが判然として居るのに、勉強せないうで居るといふことは僕には出来ぬ。成績ではない。いはば忠実(?)。といつて仲々準備に成算うまく行くかあぶないので少々まるる。歴史を *read* にかく。これもなか／＼時間を取つて労多くして功少い様に思ふ事も時々あるが、なか／＼習慣の力は大きなものと今更の如く感心せり。

前半は井川恭と「基督教に対する議論」をしたことの記録である。「宗教はすべて他のものと同じく主観的のもの」と当時の忠雄が考えていたことは、興味深い。客観的把握のできない分野であるとの考えは、以後の忠雄のキリスト教体験とも重なって行く。井川恭の「向陵記」には、この日の部分が欠けており、遺憾ながら紹介できない。

後半は試験に対する考えが示されている。これも矢内原忠雄という人物を理解するのに大事な記述である。忠雄はよく秀才ということばに飾られがちであるが、実はそうでなく、努力家であった。こ

の箇所をはじめとする彼の日記を読んでいると、彼は試験に際しては、かなり慎重に臨んでいる。「僕は遊んで居てよく出来ればよいが、さうも行かぬ故試験前などには人一倍勉強せねばならぬ」が、彼の神戸一中時代からのモットーであった。今時のことばを用いるならば、彼は今治時代の富田尋常小学校時代から勉強に対するよき生活習慣が備わっていたのである。両親や祖母、そしてよき教師に恵まれて身につけた勉強習慣、それが早くから努力の大切さを知った人間にさせていたのであった。歴史をカードにとつて覚える、考えるというのは、確かに「労多くして功少い」ことながら、彼はその努力が酬われることを知っていた。彼は正攻法で試験に臨む青年であった。努力しないでもよい成績の取れる秀才ではなかった。

矢内原忠雄の向陵生活は、充実していた。基督教青年会と弁論部活動は、彼の向陵生活における課外活動の両輪であった。基督教青年会は約三十名の会員が所属した。主たるメンバーは、三谷隆信・長崎太郎・石田三治・金沢常雄らであった。彼は出来るだけ集会には出席した。弁論部では入部以来しばしば練習会で演説をした。月一回の割合で演説をしている。このほかにも彼はさまざまな体験を一高一年生時代に積んでいる。寮生活にも次第に慣れた。この年六月六日、忠雄は内村鑑三の講演「ジョン・ブライ伝」を、河合榮治郎や三谷隆信らと柏木の今井館に聴きに行く。「内村先生のお話をきくと実に身がしまる。どうしても僕などは時に強き刺戟を必要とする」と彼は日記に書きつけている。

一高一年の期末試験を終え、六月二十一日、夜行列車で忠雄は河西實三と帰省の途につく。途中神戸に寄ったので、帰省は二十八日になった。神戸から今治までは船である。この日の日記に忠雄は「家

に帰りて第一の喜びはすべて健在なること也。今宵一家団欒の樂しみ、そも如何なりしぞ」とある。忠雄は二ヶ月余、故郷で過ごした。「帰りたし帰りたし」と日記に書き込み、思い続けたなつかしい故郷である。今治在の富田村松木は、平凡な農村ながら、忠雄にとつては、忘れることの出来ない地であった。

帰省中にはさまざまな本に親しんでいる。小学校を終えると、すぐ神戸の地に移ったこともあり、故郷での友人は少なかった。彼は読書に打ち込む。九月一日夜、忠雄はしばらく日記を付けなかったことを後悔し、故郷での生活の想い出を記すとして長い長い文章を書いていくが、中に読書に関しての箇所を見出す。故郷での読書生活の断片である。

故郷にての生活は語るに友なく実に静平なる生活なりき。思索と読書とに日を送りたりき。西の空の夕照に映ゆる頃稲田道を散歩するは実に愉快なりき。思はず讚美の祈り湧きぬ。
 “Ecce Homo” をよみて Christ が非常に吾に近づかれし気せり。
 吾は personal にうごかざるゝこと実に大なりき。而して一方新約全書を読み、Christ に倣へる生活に入らんことを希ひ心をはげまし胸を躍らして祈れり。“Ninety-three” 及 “Tom Brown's School Days” を再読せり。

他に Little Lord Founlerery & New Testament & Cuore & Wordsworth などを英文で、日本語では『青年への警告』(山室希平)『求安録』(内村鑑三)『欺かざるの記』(国木田独步)『此一戦』(水野広徳)『虞美人草』(夏目漱石)などを読んだことが、日記からうかがえる。また、

内村鑑三編集の雑誌『聖書之研究』七月号に載ったルーテル・石川鉄雄訳「基督信徒の自由」からは、大きな慰めを与えられることになる。ルーテルの言う、「人を清むるは信仰のみ。聖むる力は信仰の増すに従つて大となる。善業は敬虔と祝福とを克ち得るものにあらず、事業の量の多少を以て敬虔魂を克ち得るものにあらず」によつて得た慰めと言えようか。いわゆる信仰義認論である。ローマ・カトリック教会の義認論は、信仰のみでなく、よい行いが伴うことを不可欠の条件にしたのに対し、パウロは律法の行いによらず、ただイエス・キリストの信仰のみを義認の唯一の条件とした。それを受けて、ルーテル(ルター)は「人を清むるは信仰のみ」と明確に示したのであった。

忠雄は「基督信徒の自由」を読み、眼が開ける思いがあつた。彼は「実にこの一篇は love と God との宿題に一快刀を加へしものなり。余は専ら神を信じ神を愛しイエスに縋りて救を完うせざるべからず。否救はれたりとの事実を十分明かにして感謝の涙に漂はざるべからず。God に至りてはたゞ神を愛するなり、神の意を喜ばせんとためなり。而して実に無為は人を殺し妄念を生ぜしむ。余は此の一篇によりて実に胸通じ喜び満ちぬ。余は海に臨み山に登り月を見雲を見、少年を見て泣きぬ、讚美しぬ、祈りぬ。日月星辰山川草木、我を囲みて実に美し」と書く。「少年を見て泣きぬ」の一文は、神戸一中の後輩との交わりを指す。

日記には「明德軒」という名が書き込まれ、そこに行くべきか故郷にとどまるか悩んだ末、出かけたことが記されている。「明德軒」とは、実業家高島太介が設立した四十坪ほどの公会堂である。一九〇八(明治四二)年九月六日に開軒式を行ったと『御影町史』

にはある。場所は神戸一中にも近い、阪神電気鉄道東明発電所の東隣りである。明德軒は神戸一中と関係が深く、生徒の集会場にも用いた。「合宿所」のことも見られる。神戸一中では夏に有志の学習塾が開かれていた。忠雄は卒業生の指導者として「明德軒」の集會に出席を要請され、参加したことで、大きな恵みを得たという。「われは実に強く神の愛を感じり」とある。自分より年下の中学生と起居を共にし、信仰をより強く持ったと彼は日記に記している。

一高入学後初めての夏休みを終え、九月九日、帰京した矢内原忠雄は、寮の編成替えて東寮十六番に入る。一年生時代は各科を越えての集団生活であつたが、二年からは各学科ごと、運動部ごとの人たちが集まり、寝起きすることになる。そこで忠雄は二年になると、法科志望の三谷隆信や舞出長五郎・井口孝親・野呂一雄・石井満らと同室になる。三谷隆信の回想記「向陵の三年」に「当時一高の寮で二年以後は、英法とか独法とか、ポルトとか、柔道とか、互いにリストを作つて希望の部屋に入る習慣であつたが、矢内原君と私とは英法のグループ十二人で東寮十六番に入室、そこに二カ年仲よく暮らした。我々はこれを東十六村と命名した。東十六村は永くつづいた。大学時代は勿論、社会に出てもよく集まつた。そして今に続いている」とある。同室雑誌『東十六』も出している。

一年生時代の南寮十番では、井川恭が中心となつて『南寮タイムス』を出していた。井川は文章を書くことの好きな文学青年であつた。『南寮タイムス』の一部は、森田浩一の日記に挟み込まれ残つており、福生市郷土資料室が保管(一一三号)している。東寮十六番の『東十六』は、一年生時代の『南寮タイムス』に学んだもので、右の三谷隆信の証言によると、「この『東十六』誌には矢内原君も

健筆をよく振った一人である」そうだ。一番多く『東十六』のペー
ジを埋めたのは、忠雄と同じ弁論部所属の井口孝親であったとは、
これまた三谷隆信の言である。

三 内村鑑三門に入る

一九一一年(明治四四)年九月十二日、この年の入学式があった。新
渡戸稲造校長は八月、日米交換教授として旅立って留守のため、菊
池壽人教頭が代理を務めた。当日の日記に忠雄は、「菊池教頭の訓
辞実によりかりき。殊に只今落手せしばかりなりとて新渡戸先生が横
浜を去らんとせる時われらのために残されし訓辞をよまるゝに至り
ては思はず落涙せり。あゝ先生！ 先生！ 如何に心さびしきぞ
や！」と書く。忠雄の新渡戸稲造への熱き思いが伝わってくる。

二年生になって忠雄が力を入れて学習したのは、岩元禎のドイツ
語であった。岩元は漱石の小説『三四郎』のモデルとされる人物で、
学生を容赦なく叱りつけ、揚句は成績の悪い生徒を大量に落第させ
る先生であった。「岩元さんの独乙は実に戦々兢兢たり。随分むつ
かしくて大に勇氣と忍耐を要す、しつかり勉強せざるべからず」と
彼は、日記(一九一一年・九二二)に記している。

ところで、一高二年生の矢内原忠雄最大の事件は、内村鑑三の聖
書講義への出席であった。つまり、忠雄はそれまで私淑していた内
村鑑三に直接教えを受けるようになったのである。後年の忠雄に、
「教師としての内村先生¹⁷⁾」という小文がある。そこで彼は以下のよ
うに言う。

私は小学校より大学卒業に至る迄数多くの教師に就て学ん
だ。しかしそれらすべての学校教師より受けしことの総計も、
内村先生より教へられし処に比すれば、其重要さに於て九牛の
一毛にも当らない。又私が継続的に一人の教師に就て学びたる
年月も、内村先生の下に於ける程久しきに亘りたるはない。先
生は最後まで福音を教へられたるが故にたゞ先生の死によりて
のみ現実なる師弟の關係は終り得たるものであつた。実に教師
は多かつたけれども、先生こそ教師中の教師であつた。或は、
先生のみが眞の教師であつた。

そのことは第一には教へられし処の内容より来つた。学校教
師の教へし処は多く技術であつた。或は眞理の糟粕、断片、若
くは影であつた。然るに先生の教へし処は眞理そのもの、生命
そのもの、及び之を獲得する途であつた。即ちイエスキリスト
と其十字架であつた。聖書はその教科書であつた。人類の教育
にとりて之れ以上の主題と之れ以上の教科書とが何処にあらう
か。それは単に知識の問題ではない。品性の問題ではない。実に
生命そのもの問題である。束縛より自由に、罪より救に、死
より生に、人間中心より神中心に。茲にコペルニカスの転回以
上の人生の転回がある。キリストこそ眞理なることを、私は今
衷心の歡喜を以て告白して憚らない。而して神に立てられてそ
の福音を我等に宣べ伝へし者の足は如何に美しかりしか。内村
先生が、バタ臭き基督教、坊主臭き基督教を一掃して、キリス
トの純福音を日本人のたましひに確く植ゑる為めに神に選ばれ
し、偉大なる預言者的教師たりしことを、誰が疑はう。

更に、教師としての先生の態度が無比であつた。その如何に

剛健なりしか。先生はその教へらるゝ、真理の如何に神聖貴重なるかを熟知せられたるが故に、決して豚に真珠を投げ与へなかつた。先生は決して聴衆若くは読者に媚びられなかつた。先生は聖書の真理なりとする処をば、如何に近代人の感情に反するとはいへ、断言して憚られなかつた。而して、それに不満なるものは今日限り退会して次回より又来る勿れと、屢々宣言せられた。かゝる際の先生の勢は繩の鞭を以て全聴衆をたゞき出さんばかりの劍幕であつた。之を先生は大掃除と称せられた。先生はかく峻厳に真理の言を守られた。先生は聴衆の爲めに語るといはんよりも、神の爲めに語られた。

けれども又先生の教師としての態度には如何ばかりの愛が籠つたか。先生は聴衆のたましひを愛せられた。先生は屢々語られた。講演は実に疲れる。それは聴衆一人一人のたましひに対する配慮があるからである。自分のありたけを全て聴衆に与へつくすから講演の翌日は自分は廢人の如くなつてしまふ、靈的疲労の如何に恐ろしきものなるかは講演をしなければわからない、と。先生の講演には実に兄弟の爲めに生命を与ふるの愛がこもつて居た。

やや長い引用となつたが、それには意味がある。なぜなら、ここに矢内原忠雄の師内村鑑三に寄せる思いと、鑑三のキリスト者ととしての特色が的確に表現されているからである。忠雄はよき師に巡り合つたことになる。彼は一高入学以来『聖書之研究』の熱心な読者であつた。忠雄晩年の「内村鑑三」¹⁵よると、「(一九一一年)九月の『聖書之研究』誌に、一箇年以上の読者は毎日曜日の聖書講義に出席出

来る旨の広告があつた。私は聖書之研究社直接の月極読者ではなかつたし、『聖書之研究』を読み始めてから一箇年すれすれであつたが、この機会をばづしてはと思ひ、先輩に口添へをしてもらつて、特に入会を許していただいた」とのことである。内村鑑三は一八六一(文久元・万延二)年二月十三日(旧暦)、江戸小石川の生まれである。矢内原忠雄の入会当時、五十歳であつた。忠雄は十八歳、二人の年齢差は三十二歳である。

ここで内村鑑三にやや詳しく触れておこう。矢内原忠雄を考えるのに、内村鑑三を抜きには語れないからである。かつてわたしは「内村鑑三論―制度的なるものへの反逆―」¹⁶というやや長文の論考で、この人物を論じたことがある。が、わたしの著書のいずれにも未収録である。そこでこの論文の大筋によりながら、この特異な人物を紹介しよう。

内村鑑三は第一に独立独歩の人であつた。一八九五(明治一八年)五月、英文で刊行された彼の著作「余はいかにしてキリスト信徒となりしか―わが日記より」¹⁷には、キリスト教入信前の少年時代から入信後アメリカ留学を終えて帰国するまでの、およそ二十年にわたる自己の精神生活が描かれている。ここで彼は、独立独歩の自己の歩みを語る。没落士族の長男として生まれ、官費による勉強ができるという理由で、札幌農学校の第二期生となつたことは、鑑三の生涯を決定した。札幌農学校にはW・S・クラークによつて教育され、キリスト教の信仰を受け入れていた第一期生がいた。鑑三は彼らから信仰の強要を受けて、「屈服」するかたちで「イエスを信ずる者の誓約」に署名する。彼が若き日に、それまで自身も信じていた八百万の神々と決別したことを、一つの筋道を立てた論理に仕上

げることとは不可能である。ただ、言えることは、そこに一方的ともされる神の力が鑑三に臨み、大なる回心をもたらししているということだ。そこには人間の想像を超えた一つの事実、——神によって捉われた人間の誕生があった。

鑑三の独立独歩の精神は、洗礼をうけて「新しい人」となった時に勢いよく芽吹く。彼は同志と寄宿舎内に小さな教会を組織したのにはじまり、やがては独立教会を夢見るまでになる。彼の信仰を守り、独立独歩の精神を育んだのは、同時に受洗した太田（のちの新渡戸）稲造・宮部金吾・藤田九三郎・広井勇らとの交わりであった。彼らは熱い信仰と友愛の信仰的団体^{エクレシヤ}を形成していた。一八八一（明治一四）年七月、札幌農学校卒業に際して鑑三は、太田・宮部とともに「将来を二つのJ (Japan, Jesus) に獻げよう」と誓い合っている。右の「余はいかにしてキリスト信徒となりしかーわが日記より」の第四章「新しき教会と平信徒説教」には、かたくなな父をはじめとする家族への伝道の成功と、外国ミッションを離れ、独立した邦人の教会を組織していく様子が記されている。鑑三の独立心は、教会建設に当たってメソジスト監督派伝道団の宣教師のとつた狭量な態度に刺戟され、一段と強固なものとなっていく。キリスト教に教派閥があることを、彼は入信後間もなく気付かされる。そうした教派制度の弊害への反発は、彼をして無教会主義へと赴かせることになる。それは既成教会の偏狭な教会政治へのプロテストであった。主の教会形成という仕事を通し、彼の独立独歩の精神は磨かれる。

一八八四（明治一七）年から三年半に及ぶアメリカ留学中に、内村鑑三が常に考えていたことは、自己の立場をいかにして守り、独立心の権威を失墜させないかということであった。彼は特別養護施設

設で働き、ぎこちない英文による売文で何とか過ごそうとした。「独立こそが賢明な道」との考えで、鑑三は異国にあっても自己の立場を守り抜こうとする。孤独なアメリカ生活にあって、彼は「ヨブ記」や「エレミヤ書」を熱心に読んでいた。「余はいかにしてキリスト信徒となりしかーわが日記より」に収められた日記に、そのことが記されている。一八八五（明治一八）年一月六日の項に、「ヨブ記を読む大いに慰められる。／再び尊敬すべきアルバート・バーンズの助けにより、彼の『注解書』二巻を一気に通読した。すべての災いも、その終局は善に終わることが、今やはっきりと私の心に印象づけられた。その時以後、私はどんな暗黒の中にあっても、この人生観を見失わなかった」と彼は書く。

『旧約聖書』、特に預言書との出会いは、彼の以後の生涯に大きな感化を与えるものがあった。同じ年の五月二十七日の日記は、「エレミヤ書」を読み、いたく感動し、「見よ！ これはなんたる書か！ 実に人間的で、実にわかりやすく、未来のものがたりはごくわずかで、現世への警告は実におびただしい！ 全巻を通じて一つの奇蹟をも行わぬ人間エレミヤが、人間のあらゆる強さと弱さとをむき出しにした姿で、私の前に示されたのである」と書きつけている。時代の預言者、〈制度〉的なるものへの反逆者としての鑑三の資質は、アメリカ滞在中のさまざまな体験と『旧約聖書』との邂逅によって鍛えられていく。

なお、矢内原忠雄が後年『余の尊敬する人物』^註で巻頭「エレミヤ」をとりあげていることも想起される。忠雄のこの本に関しては、のちの章で取り上げる。『聖書』以外の書物で鑑三の精神形成に与つたのは、カーライルの『クロムウェル伝』であった。「余は之に由

て自由と独立との愛すべく貴むべきを深く教へられた」(『聖書之研究』一三三号、一九〇九・一〇)と鑑三は書きつけている。クロムウェルは、これまた矢内原忠雄の魅せられた人物であり、『続余の尊敬する人物』²²⁾で取り上げている。

内村鑑三は帰朝後、学校教師として働く。が、当初勤めた新潟の北越学館の教頭職は、宣教師との衝突で三ヶ月ほどで去り、また、よき職場と思われた第一高等中学校は、「不敬事件」によつてこれまた去らねばならなかった。その後の大阪泰西学館・熊本英学校・名古屋英和学校などでの勤務も容易ではなかった。『基督信徒のなぐさめ』や『求安録』などの著作は、この間に成つたものである。独立の志を常に掲げて福音を説くには、文筆による自由業以外にはないとの考えが、次第に鑑三に定着する。かくて『萬朝報』²³⁾の記者を手はじめに『東京独立雜誌』を経、『聖書之研究』に至る筆の人、内村鑑三が誕生する。

内村鑑三は矛盾を生きた人である。彼は逆説を好み、そこに詩的解釈を加えることが得意であつた。彼は歴史と時間を越えて存在するイエス・キリストに眼をとめ、現実の日本にキリスト教を定着させようとして、あえて矛盾に生きたと言っているのである。彼には武士道とキリスト教を合体させるといふ思いがあつた。それは矛盾でなく何であろうか。彼には「武士道と基督教」(『聖書之研究』第二〇一号、一九二四・七)と題した講演記録があり、そこでこの問題を扱っている。鑑三の考えた武士道的キリスト教は、矛盾の産物であり、一歩踏みはずすと異端の道をも歩まねばならぬ思想のようにも思われる。が、理屈で割り切れぬもの、矛盾を越えるものとして鑑三の武士道的キリスト教は存在する。そこに武士道に基づくピュー

リタンの清潔なキリスト教が見出せるのである。

矛盾を生きた内村鑑三は、戦争に対しても義戦論と非戦論という対立した考えを示した。が、日清戦争に義戦論者として「日清戦争の義」(『国民之友』第二三三号、一八九四・八・三)を書いた鑑三は、十年後の日露戦争では、非戦論者として戦争絶対廃止論を唱えるのであつた、日清戦争が侵略戦争であつたという痛切な反省の上に立ち、鑑三は非戦論者へと転進したのである。戦争に突入するや彼は、幸徳秋水・堺利彦らと『萬朝報』を退社し、『聖書之研究』を舞台にその反戦論を展開する。「余が非戦論者となりし由来」(『聖書之研究』第五六号、一九〇四・八)をはじめとする文章は、かつて義戦論を述べただけに深い内省を伴い、根強い反戦論となつてゐる。それは歴史学者色川大吉によつて、「キリスト教伝道者の粹をはるかに越えた広い社会活動と深い内的な力によつて、天皇制イデオログと最も激しく対決した明治中期の第一級の思想家」と評価される面を含んだ緊張感に支えられた文章であつた。

内村鑑三のこの頃の文章は、悲痛な叫びを発していても、結末には常に明るい展望がある。そこに再臨の主、イエス・キリストへの信仰が脈打っているからなのである。それを見逃してはならぬ。彼は常に理想を高く掲げた人であつた。『後世への最大遺物』(便利堂書店、一八九七・七)などにそれを見ることが出来る。内村鑑三を『旧約聖書』の預言者エレミヤにたとえて「悲哀の人」と呼ぶ人がいる。矢内原忠雄もまた師となる鑑三を「悲哀の人」という。さきに挙げた忠雄の『続余の尊敬する人物』にも、鑑三を「戦闘の人であり、自由の人であつた先生はまた悲哀の人でありました」の一文を書き込んでゐる。

一九一一(明治四四)年十月一日、日曜日、矢内原忠雄は親友三谷隆信と共に始めて、東京新宿柏木の内村鑑三宅を訪れる。この日は、忠雄の内村鑑三入門日として長く記憶されることとなる。先にも紹介した忠雄の「内村鑑三」には、「その年十月一日が、私が内村鑑三先生に入門した最初の日であった。柏木の先生の住居の構内に今井館と呼ばれた別棟の二階家があつて、廻り縁のついた階下八畳の室が集会室に用ひられた。先生は小さい机を前にして、椅子につかれ、二十人ばかりの青年が畳や縁側にすわつた。私も先輩のうしろにかしこまつた。その日の講義は詩篇第六十五篇九―十三節であつた。その日から、先生と私との直接的な師弟の道が開けた。それは私の生涯について、決定的な日であつた。おごそかな、また幸福な日であつた。その日の日記に、「隆信君と相携へ、畏敬の念に胸を躍らせつつ今井館に至りぬ。」とある感動が、四十年後今なほ私の記憶に新である」との記事を見出すことができる。以後、彼は日曜日ごとの内村鑑三の聖書研究会に出席することとなる。それは鑑三の死まで続いたのであつた。それを書くのも本評伝の一つの柱である。

四 倉田百三の批判に應える

前述のように、矢内原忠雄は入学以来弁論部員として熱心に活動していた。内村鑑三の聖書研究会入門の前後も、それは変わらなかつた。一九一一年の様子は、『矢内原忠雄全集』第二十八巻の日記「明治四十四年」からうかがえる。彼は練習会で演説したことは、日記に記していた。そのタイトルと自身のコメントを示すと、次の

ようである。

一月二十日 「救済」

「清沢先生の信念」中救済に関することを骨子として余の信仰に関することを述べたり。」

四月二十一日 「人一人」

「練習会に出席。「人一人」といふ演説をする。」

十月六日

「殉教者の血」

「弁論部練習会に出席。「殉教者の血」なる題下にて演説す。」

十一月七日

「単純なる心」

「午後三時より一大教場にて弁論部大会あり。「単純なる心」といふ題にて僕が演説せり。何だか声が苦しかりしも一生懸命にやりたり。多くの人が聞いて下さりしが寧ろ気の毒なりき。されば余は既に公衆に対して余の意見を發表せしものなれば今後いよいよ自重せざるべからず。」

十二月一日 「たしかなる事」

「たしかなる事」

「聴衆の中に倉田君もあり。余は「たしかなる事」と題し、人生のうち最もたしかなることは吾人の生きて来れる事と、死すべき事となり、われらはこの厳肅なる事実、この不思議なる「いのち」を思ひて寧ろ戦慄せざるを得ず、わが生

命はいづくより来りていづくに去るや、わがこの世にうけたる生涯は無限の過去と無限の未来との間に介在する五十年なり、自分は人間が如何にして生れきしや、生命とは何ぞ、かく感ずるが人生問題の最初の一步なりたし。云々。」

忠雄は演説が好きであった。自分の意見を述べるのが得意でもあった。彼は部活動に積極的で、進んで練習会の演説を引き受けた。そうした点が認められ、翌年（一九二二・明治四五）には一高弁論部第十四代委員となつたことは、すでに述べたところだ。

弁論部でのこうした活躍は、一高生の人目を引いた。当時彼は真剣に信仰を求めていた。この年九月十九日の日記の一節に彼は「私の進むべきは愛のみ。愛の泉涸るゝ時、義の考失する時われは死するなり、見よ法律は完成せりと雖も Athens は傾きしに非ずや。学問も知識も *Wisdom* も愛の衣服のみ。如何で本心を忘れて衣服の末に走らんや。あゝ我は単純なる心に帰り強き心に立ち *Patience* が所謂 *Childman* として強く無邪気に立たん哉。われは到底人のための我、我のための我にあらざるべき也。たゞ神に対してわが花を開くべき也」と記している。「進むべきは愛のみ」で、「我は単純なる心に帰り強き心に立ち」（傍点筆者）進みたいと言うのである。この頃忠雄は、英訳でトマス・ア・ケンピスの *THE IMITATION OF CHRIST* を熱心に呼んでいた。九月十三日の日記に「*Imitation* をよむ（復読）」の一文を見出すこともできる。現在は『キリストにならいて』の題

で、岩波文庫²⁵⁾ほかにも数種の訳本が存在するが、当時は訳本はなかった。そこで英文で読んだのである。

右の「単純なる心」を標題にした演説が行われたのは、二十日後の十一月七日、火曜日である。そこには当然のように『キリストにならいて』の影響が考えられる。キリストにならって生きるとういことかは、当時の彼の大きな課題であったのだ。忠雄は純な精神の持ち主であった。そうした仲間の一人に長崎太郎がいた。当日の「忠雄日記」に、「十時半頃帰途につく、雨は止みて月が折々雲のすき間から洩れる。僕は長崎君と話しもて帰る。長崎君は実にいゝ人なり。話の要は僕達はうれしい、然し駄目だ、といふにあり。余はこの時ほど「語る」ことの力を感じたことはない」と彼は書く。

すでにふれたが、長崎太郎は前年一九一〇（明治四三）年のクリスマスに、日本基督教会市ヶ谷教会で受洗をしたクリスチャンであった。彼は級友にしきりに教会行きを勧めた。また、右の *THE IMITATION OF CHRIST* に沿った生活を説いていた。文科の哲学好きの藤岡蔵六はそれを批判し、「どんなに偉大な人間にだって批評の余地はある。批評もせずに模倣するだけなら自己の個性や独自性は無くなる、極限すればそれは最早自己ではなくて他人である、模倣は創造に及ばない、吾々は自己を創造しつつ成長発展しなければならぬ」と主張した。²⁶⁾

十月六日の弁論部練習会で、矢内原忠雄は「殉教者の血」と題した演説をするが、彼の前に演説をしたのは、独法の倉田百三であった。題は「ウィリアム・ジェームス博士を追憶して」というものであった。忠雄の当日の日記には、「哲学的の御演説なりしも余にはさしたる響きを与へざりき」とある。

その夜倉田百三が訪ねてきたことを当日の「忠雄日記」は語る。以下のようだ。「散歩に行かんと思ひ居る処へ倉田君来訪、共に上野へ行く。倉田君とは従来一面識なし、今日始めて練習会にて名と顔とを照合せしのみ。而して今日の彼の来訪の因やまた知るべきのみ。上野の某堂にて語れり」とあり、さらに「余は自己の信仰につきていさゝか述べたり、然れども到底彼は哲学的なり我は宗教的なり。彼は知識ありて罪を知らず、我は罪にnageきて信ず、信ずるが故に信ずるなり。「信」は知識にあらざるなり。余は倉田君を如何ともする能はず、たゞ為に神に祈りてその霊の声に耳をかたむくるの日あらんことを願ふのみ」とある。

倉田百三は一八九一(明治二四)年二月二十三日、広島県三上郡庄原村(現、庄原市)の生まれ。広島県立三次中学校(現、三次高等学校)を経て、一九一〇(明治四三)年九月、第一高等学校第一部丙類に入学した。無試験検定には落ちたが、『官報』(第八一三七号、明治四十三年八月五日)によれば、試験入学二番の好成績であった。彼は中学時代に休学したこともあつて、年齢は矢内原忠雄より二歳上となる。中学校時代から文学を好んだ。後年戯曲『出家とその弟子』(岩波書店、一九一七・六)や評論集『愛と認識との出発』(岩波書店、一九二二・三)がベストセラーとなったことで知られる。一高では文芸部に所属した。弁論部には二年になる際に独法に転じたことから入部したのである。それゆえ入学早々入部し、華々しく活躍していた矢内原忠雄には、競争心を抱いていた。矢内原伊作の『矢内原忠雄伝』には、「懐疑に懊悩していた倉田百三にとつて、懐疑を知らないかに見える矢内原忠雄の存在はいわば目ざわりな、とにかく気になる存在だった」とある。倉田は矢内原忠雄の人物を見定め

たく、夜の訪問となったようである。

が、倉田の目には矢内原忠雄は、THE IMITATION OF CHRISTで武装し、数日前に入門した内村鑑三の著作や講演の強い影響を受けた、自分には齒の立たない人物に映った。二人はこの年十一月十七日の弁論部大会でも論じあつた。倉田百三は「欲求と力」、忠雄は先の一覽に示したように「單純なる心」と題して演説した。当日夜半から午前五時十五分に至るまで、忠雄は日記帳に主として倉田百三の演説から喚起されたことどもを記す。「誠に倉田君と余とは大にその立場を異にし従つて見解を異にす、此の演説は全く余に對してなされた駁論かと思はれる」「余と倉田君との立脚点の相違は神を認むるや否やにあり」と「罪とは何ぞや、これまた一つの問題なり、倉田君は曰く余は罪を知らずと。実にや罪は論じてつくるべきものにあらず、感じてなげくべきもの也」「感謝すべき哉、神は今日倉田君の口を通して大いにわれの信仰をかためられたり」等々。

倉田百三の矢内原忠雄批判は続く。忠雄が一九一三(大正二)年五月九日に行つた演説(題名不明、この日の忠雄の日記に骨子は書かれてゐる。「一高に感謝する点」ほか)への反論の意を込めた倉田百三の「生活批評——矢内原忠雄君にあたふ」が『第一高等学校校友會雜誌』第二二七号に載るのは、一九一三年六月十五日のことである。これはのちに「自然児として生きよ—Y君にあたふ」と改題、「愛と認識との出発」に収録された。この一文は全寮茶話会での忠雄演説の否定にはじまり、「あなたはどうしても今少し深く内省する必要がある。声あまり大きすぎる。自己の生活にもつと空虚と寂寞と分裂とを意識せねばならない筈である。動もすれば公の会合などで奔走されるのを少し控へて、淋しい深い孤独な思想をいつくしむことを心が

けなくては、あなたの Morality といふものは軽い、浅いものとなりはしないであらうか」とその生活を問い糾す。

忠雄は誠実に一高でのあらゆる集会に出席し、必要な部署での責任ある地位に就いていた。それが目立ちすぎる感を与えていたのも確かである。倉田はそこを指摘する。さらに「Y君、あなたの心の眼をもつと深く、鋭く、裸にして人生を眺める必要はありはせぬか。常識を捨て給へ！此の語をあなたの耳朶に早鐘のごとく響かせたい」とも言う。——こうした調子の文章が長々と続き、「私の無遠慮な批評が少しでもあなたに反省を促せば幸いである」とのことばで結ばれる。二歳年下の純な少年、矢内原忠雄を忠告した文章との印象が強く残る。秀才・優等生を放棄した倉田百三の率直な魂の叫びともとれる。直観重視の忠雄に対し、客観重視の百三は、「思惟の凝視」を説く。

忠雄は卒業試験の最中の六月十六日、月曜日に倉田の文章を読む。「校友会誌六月号をくれる。それに倉田百三君の「生活批評」といひて僕の内生活を批評したる論文あり。余のモラリティーが極めて社会的、外的、範疇的にして内的に生命に対する道をかへりみず、内省乏しく苦悶懊悩のあとなきを忠告せられ、更に僕の生活が素樸的センチメンタリズムを脱せざるを告げて涙のかれたるシヨオの人生のみ方を教へられたり。余は最も感謝してこれをよみたり。(中略)倉田君もわれの恩人なり。但しわれは倉田君や佐野君の如くにして神を見出すこと能はず、余はキリストなき神を知るあたはず。故に余は倉田君のいはるゝ如く善人を以て任ずるものにて勿論なく、孤独を感じざるにても、心のくるしみを全く感ぜざるものにて勿論なし。倉田君に手紙かけり」との日記の記事は、忠雄の真面目を示す。

ここに出て来る「佐野君」とは、倉田と同時に『第一高等学校校友会雑誌』第二七号に「神の発見の過程」を発表し、全学の注目を集めた佐野文夫である。彼は菊池寛の「高退学事件に絡む。佐野は後年、日本共産党の初代委員長となった。」倉田百三は右の文章「生活批評」を「愛と認識との出発」に収録するに際して、「附記」を添え、以下のように書いている。事の経緯を語る率直な文章である。

(附記) 自分は此の文章に対してY君から一の手紙を受取つた。それは本当にクリスチャン基督者らしい、謙遜な、少しも反抗的な気分が含まれない且つ美しい智慧に富めるものであつた。その手紙はその後の自分に深い、いゝ影響を及ぼした。自分は数年後広島島の病院から君に自分の不遜を謝する手紙を送つたのに対して、君はまた実に美しい手紙を下さつた。そして自分を青年時代の恩人の一人に数へて下さつた。自分は君の名譽のためと、君に対する自分の敬意を表するために此の事を附記することを禁じ得ない。自分が今日クリスチャン基督者に対して、あるツアルトな感情を抱いてゐるのは君に負う処が多い。自分は此のことを君に感謝する。

Y君とは、むろん矢内原忠雄のことである。忠雄の偉さ・妻さは、この事件にも示されている。マイナス要因をもプラスに転化してしまふ精神、それは人間的努力で得られるものではない。信仰が彼を支えていたのである。トマス・ア・ケンピスの THE IMITATION OF CHRIST (「キリストにならうて」) は、矢内原忠雄の精神的支柱であつた。

後年のことになるが、ドイツ留学中の矢内原忠雄は、倉田百三の『愛と認識との出発』が、日本でベストセラーになっているのを知る。彼は内心忸怩たるものがあつたものの、「ただ事後十年の間未だ神のすて給ふ処とならず、キリストは思索無しにもわかるのが感謝である。キリストがわが磐^{いは}わが櫓^{ぐさ}なれば我はとこしへに勝ち誇らん」と一九二二(大正一〇)年十月五日の日記に書き留めることになる。

- 注1 関口安義「恒藤恭と芥川龍之介―蘆花「謀叛論」を介在として―」『大阪市立大学史紀要』第3号、二〇一〇年一〇月三〇日
- 2 河合榮治郎「項羽論」東京府立第三中学校『学友会雑誌』第11号、一九〇七年二月二日。なお、この力作評論は『河合榮治郎全集』全二三巻、別巻一、社会思想社には、収録されていない。
- 3 芥川龍之介「義仲論」東京府立第三中学校『学友会雑誌』第15号、一九一〇年二月一〇日。『芥川龍之介全集』第二巻、岩波書店、一九九七年一月一七日収録。七四―二〇〇ページ
- 4 関口安義「河合榮治郎と芥川龍之介(序)」『文教大学国文』第31号、二〇〇二年三月一日、のち『芥川龍之介の素顔』イー・ディー・アイ、二〇〇三年六月一日収録。二二六ページ―二四二ページ
- 5 矢内原伊作「矢内原忠雄伝」みすず書房、一九九八年七月二三日、一六九ページ
- 6 井川恭「赤城の山つゝじ」『松陽新報』一九一三年七月一六、一七、一九二二、二三、のち「赤城山のつづじ」と改題、『旧友芥川龍之介』朝日新聞社、一九四九年八月一〇日収録。二二六ページ
- 7 藤岡蔵六「父と子」私家版、一九八二年九月(日付なし)収録。一七六ページ
- 8 注5に同じ。一七五ページ
- 9 注5に同じ。一七六ページ
- 10 三谷隆信「向陵の三年」南原繁・大内兵衛・黒崎幸吉・楊井克己・大塚久雄編『矢内原忠雄―信仰・学問・生涯―』岩波書店、一九六八年八月三日収録。四四ページ
- 11 注7に同じ。一五九―一六〇ページ
- 12 石井満「矢内原君と僕」南原繁・大内兵衛・黒崎幸吉・楊井克己・大塚久雄編『矢内原忠雄―信仰・学問・生涯―』岩波書店、一九六八年八月三日収録。四九ページ
- 13 清き岸べに刊行会編『清き岸べに』嘉信社、一九六二年六月二五日。四八―四九ページ
- 14 関口安義「恒藤恭とその時代」日本エディタースクール出版部、二〇〇二年五月三〇日
- 15 玉木敬太郎「御影町史」御影町役場、一九三六年九月一日、三六三―三六四ページ
- 16 注10に同じ。四四ページ
- 17 矢内原忠雄「教師としての内村先生」『日本聖書雑誌』第5号、一九三〇年五月、『内村鑑三追憶文集』一九三二年三月所収、のち『矢内原忠雄全集』第二四巻収録。四四〇―四四一ページ
- 18 矢内原忠雄「内村鑑三」社会思想研究会編『わが師を語る』現代教養文庫、一九五三年二月所収、のち『矢内原忠雄全集』第二四巻収録。四八八ページ
- 19 関口安義「内村鑑三論―(制度)的なるものへの反逆―」『信州白樺』第二五・五八合併号、一九八四年四月二日
- 20 内村鑑三「余はいかにしてキリスト信徒となりしか」(山本泰次郎・内村

- 美代子訳)『明治文学全集39 内村鑑三集』筑摩書房、一九六七年二月二五日
- 21 矢内原忠雄『余の尊敬する人物』岩波書店、一九四〇年五月三〇日、一〇五四ページ
- 22 矢内原忠雄『続余の尊敬する人物』岩波書店、一九四九年一月五日、一一九〜一五四ページ
- 23 色川大吉『明治精神史』黄河書房、一九六四年六月二二日、三三二ページ
- 24 「その日の日記」とは、「内村先生」と題されたノートの方の記録である。『矢内原忠雄日記』第二四卷。四二五ページ参照
- 25 トマス・ア・ケンピス、大沢章・呉茂一訳『キリストにならいて』岩波書店、一九六〇年五月二五日
- 26 注7に同じ。一六〇〜一六一ページ
- 27 近年の岩波文庫『愛と認識との出発』(二〇〇八年一月一六日刊)の「解説」(鈴木範久)には、「矢内原忠雄は、倉田と同期で第一高等学校に入学、ともに弁論部に所属する。入学早々の一九二一年一月六日(傍線筆者)に開催された弁論部の練習会で、倉田は「ジエームズ博士」につき、矢内原は「殉教者の血」と題し演説、両者ははじめて対面した」とあるが、両者の入学は前年の一九二〇年九月であり、ふたりが共に演説したのは、入学後一年以上を経たことである。また、倉田の弁論部入部は、矢内原に遅れてのことで、共に演説をした日までは、面識はなかったと矢内原は日記に記している。
- 28 注5に同じ。一八八ページ
- 29 佐野文夫に関しては、関口安義『評伝 長崎太郎』日本エディタースクール出版部、二〇一〇年一〇月二〇日の「第三章 菊池寛の退学事件」、および「第四章 佐野文夫のその後」参照。同書四七〜九四ページ